



宮入慶之助記念館だより

特定非営利活動法人宮入慶之助記念館
2019(平成30)年 3月6日発行

第27号

巻頭言 宮入慶之助記念館の今後を考える

理事・名誉館長 太田 伸生

私たちは前理事長・宮入源太郎氏のご逝去を受けて、記念館の今後を論じました案じてきました。20世紀前半のわが国を代表する衛生学、地域保健学、寄生虫学の泰斗である宮入慶之助を記念し、その功績を顕彰して広く世に伝えていくことの責任を認識する一方で、組織としての記念館の維持発展の難しさを認識しています。宮入源太郎・前理事長のご尽力に今更ながら感謝し、舵取りを失った記念館の危機を感じざるを得ません。

私は今年の理事会において、多田 功先生のあとを継いで記念館の名誉館長を仰せつかりました。私たちの記念館のあるべき姿や今後の方向を考えるべく、医学における郷土の偉人を顕彰する記念館事業のモデルを他施設に求めて尋ねることもありました。熊本・小国の山間にある北里柴三郎記念館もそのうちの一つです。申すまでもなく、破傷風の血清療法の開発で世界的細菌学者と称えられる北里柴三郎の記念館であり、地域が郷土の偉人を讃える気持ちで設置されたものです。北里の名を冠した大学や地元行政からの支援もある一般財団法人として運営されており、小規模ながら来館者を十分に満足させる施設でした。しかし来館者は、福岡や熊本など主要都市からのアクセスが良くないこともあり、多くありません。また、規模は違いますが私が福島・猪苗代の野口英世記念館の運営にも関係していることもあり、年に3-4回野口英世記念館を訪ねます。この記念館も東京から新幹線を乗り継いでも2時間半かかる場所にありますから、近年の来館者数はジリ貧の状態です。公益財団法人として一定の財政基盤に立つとはいえ、現状では将来の存続を憂うべき状況にあります。その打開策として、展示設備を一新するとともに地元の小中学生に対する支援事業を通じた啓蒙にも力を入れています。最近の子供たちは野口英世の伝記を読みませんから問題解決の妙

薬が見つかりません。

さて、私たち宮入慶之助記念館をどうするかです。宮入博士の医学領域での業績は決して北里や野口に劣るものではありません。世紀前半にもノーベル賞の有力候補とされた日本人研究者がいましたが、宮入博士も最終候補一歩手前まで進んだことを知る日本人は驚くほど少ないのです。その意味で、私は宮入慶之助の功績を地元の長野だけでも正当に評価してもらいたいという強い思いを持っていますし、そのための課題とは何かを考えなくてはなりません。

記念館は長野市中心部から離れた地にあり、小規模でこれといったインパクトを持つものではありません。しかし、最近の訪日外国人の増加で起きている現象は、彼らが日本人では気づかなかった価値を日本の思わぬ地域で掘り起こしています。何気ない写真やコメントのSNSへの投稿で注目を浴びるようになる。夢物語ですが、近隣の川中島古戦場や松代の旧跡と併せたアピールを真剣に考えても良いのかもしれません。その実現のためには私たちの記念館に足を運ぶことによって何かを得られないといけません。国内外、老若からの意見を聞くチャンネルがあると良いと思います。また、北里、野口のほか、同じ信州が生んだ大研究者である山極勝三郎などと共に宮入博士を紹介する合同展など各地の記念館との共同事業ができるなら単独事業にないインパクトを持ちうるかと思います。他の記念館も同様の悩みを抱える現状から、相互協力も今後のあるべき姿かと思えます。現在、後任理事長に山口 明氏を得て、収蔵品リストの整理や展示様式の再考など、博物館機能としてきちんとしたものを整備いただいています。関係の皆様のご賛意のもと、記念館の良き姿を目指して歩を進めることは前理事長からの宿題と強く認識しています。

慶之助は更級郡西寺尾村の地元の小学校を卒業して、上田変則中学校に入り、父敬長の許しがあって明治13年(1880)の春に上京します。

慶之助は上京すると本郷菊坂上の独逸学校に入学します。ドイツ語を学ぼうということは医学を志すということが明確だったことと思われます。慶之助は少年の頃に「甲府盆地を中心に奇妙な風土病が流行しているのを聞き、原因を究明したいという思いが芽生えた。」と生い立ちを記した資料(鈴木和『医家列伝』2013年)があります。

この当時本郷に独逸語を教える私塾は貫通学校と独逸学校の2校がありましたが、菊坂近辺にあったのは独逸学校でした。おそらく菊坂上ということからたどると慶之助が入学したのがこの私塾と推測されます。この私塾は明治11年(1878)2月に山村一蔵によって開設されましたが、翌年7月32歳で肺病によって亡くなり、私塾は妻のミサが一旦廃校願を出しますが、そのあと再び開校願

いを出しています。明治13年(1880)12月には門人たちによって、「山村一蔵先生碑」が長命寺(東京都墨田区向島)に建立されています。

山村一蔵の墓所は小石川真珠院にあり、この顕彰碑も元は真珠院にあったのが長命寺に移されたとも言われています。

顕彰碑の表面は、九鬼隆一(帝国博物館初代館長・枢密顧問官など歴任)の篆額とともに山村一蔵の経歴、裏面には建立した門人たちの名前が刻まれています。その門人の中に上田市の山極勝三郎の名前があります。山極は明治12年3月に上京し、この独逸学校に入学して独逸語を学んでいます。慶之助は山村が亡くなった翌年に入学しているので、この石碑には名前が刻まれていないものと考えられます。

慶之助はここで独逸語を学んだあと、明治13年(1880)12月に東京大学医学部医学予科に入学します。



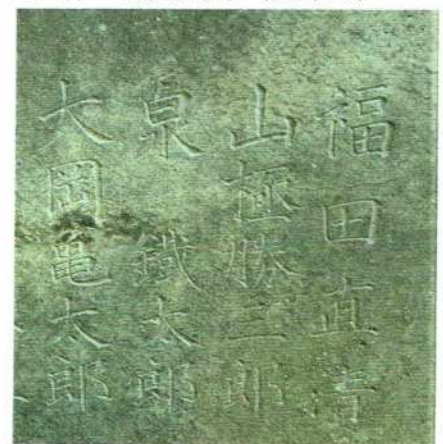
▲東京都文京区本郷菊坂の場所



▲山村一蔵先生碑(長命寺)



▲裏面に刻まれた門人たちの名前



▲山極勝三郎の名前

真摯なお取組み、誠実な対応を貫かれた館長さん

福田 初江

宮入源太郎館長さんにご縁を頂いたのは、篠ノ井東小学校在職中で、当時、地域の皆さんに「地域で子供たちに知ってほしい宝物」の紹介をお願いした時でした。その折に宮入慶之助博士のご紹介を頂きました。私は初めてお聞きした博士の偉大な業績に感動し、早速、資料をお借りして、「ハルトネッキヒ〜粘り強く〜」という題で子供たちに博士の紹介をさせて頂くことができ感謝でございました。

退職の数年後（2007年夏）、館長さんより子供たち向けに、博士の業績を分かり易く知らせるパンフレットを作りたいというお話がありました。私が小学校の教員だったからだと思います。

源太郎館長さんのお話と、「松代学校人物伝（下巻）」の「宮入貝の発見者」を中心に、記念館の資料、小林照幸先生の「死の貝」等を参考にまとめさせて頂きました。館長さんと実際にお会いしての打ち合わせは取れませんので、内容、割付、表現、例えば「中間宿主をどう表すか」等…ほとんどが文書でのやり取りで進めました。その都度、懇切なご挨拶やアドバイスを頂き、館長さんの誠実なお人柄に敬服させて頂きました。内容も、不明な点はお確かめ下さり、「ドイツ留学時代の先生はローベルト・コッホ先生ではなく、コッホ先生と同様に有名な細菌学者のフリードリッヒ・ケフラー先生であること」等を教えて頂いた事が思い出されます。

また、開館10周年記念講演会や、「宮入慶之助とミヤイリガイ展」のチラシ制作のお手伝いをさせて頂いた折には、お話をお聞きし、原稿を見て驚きました。なんと講演の講師の先生方が多田先生、石井先生、太田先生、林先生という学会のトップクラスでご活躍の先生方だったからです。けれどすぐに頷けました。博士の研究成果がそれに匹敵するほど偉大であったこと、また館長さんの記念館に寄せる思いの強さと果たしておいでの役割への賜であると。実際に講演をお聞きし、展示も見て、筋の通った本格的なお取組みであった事に改めて敬服致しました。館長さんの真摯なお取組み、ご誠実なお人柄が先生方やスタッフの皆さんからもお力を頂け、素晴らしい10周年記念行事が作り上げられたと思えました。館長さんのこんなにも早いお旅立ちには誠に無念でございます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

思い出の写真

蔦川信義



◀ 電気通信大学バレーボール部
昭和34年、国公立大学大会出場（創部4年目）
東京大学駒場コートにて
前列右から2人目が宮入源太郎さん

▶ 電通大バレーボール部 UOB 会の集まり
平成29年6月、新宿にて



「ミヤイリガイのおはなし」読み聞かせ

平成30年11月29日（木）、篠ノ井東小学校で授業の始まる前に読み聞かせが行われました。読み聞かせは地元の東犀南の方々を中心とする8名の「四葉のクローバー」の会の皆さんによって、1年生（3クラス）、5年生（3クラス）、6年生（2クラス）で行われました。「ミヤイリガイのおはなし」

年ごとに子どもたちの反応は色々ですが、読み聞かせの後、記念館に行って見ようということで記念館を訪れた時もあったようです。長野県内では、上田市の山極勝三郎（人口癌研究のパイオニア）は映画にもなり顕彰会もあって、多くの人に知られていますが、宮入慶之助はまだまだ地元にも知っている人は多くはないので、子どもたちにこうした紙芝居を通じて少しでも知ってもらうことは次代に継承していく上でも大事なことでありたいと思います。



し」は6年生2クラスで約20分間の読み聞かせで、紙芝居形式で進められました。紙芝居の文・絵は記念館賛助会員でもある丸山イツヨ（号：丸山岳隻）さんによるもので、日本住血吸虫症の分布、住血吸虫の棲むところと成長の様子、住血吸虫の一生、経皮感染の事、ミヤイリガイガイのこと、宮入慶之助博士のこと、住血吸虫症の撲滅のこと、宮入慶之助記念の紹介などを骨子に紙芝居が構成されています。



篠ノ井東小学校では12月4日（水）には2年生から4年生までの各3クラスで新見南吉、小泉八雲、モンゴル民話などの読み聞かせが「四葉のクローバー」の会の皆さんによって行われました。

「ミヤイリガイのおはなし」読み聞かせを行っていただいた「四葉のクローバー」の会の皆さんには感謝申し上げます。



「四葉のクローバー」の会による篠ノ井東小学校での「ミヤイリガイのおはなし」読み聞かせは4年前から毎年実施しており、これは宮入源太郎前館長と丸山さん達が地元で宮入慶之助という偉人がいたことを少しでも地元の子供たちに知ってほしいということに端を発したものでした。

記念館ホームページ開設

記念館のホームページは、宮入源太郎前館長、宮入建三氏によって作成されたホームページはありましたが、長い間情報が更新されないままでした。宮入源太郎前館長も生前、ホームページのリニューアルを進めていましたが、怪我や病気でそれが叶いませんでした。前館長の遺志を継いで、ホームページの開設に向けて、新たなコンテンツのツリー構造を構想して、昨年8月末にホームページを開設することができました。会員の皆様には、「宮入慶之助記念館」で検索して見ていただきご意見等をいただければ幸いです。以下に、ホームページの全体概要を記します。

- 1ー 記念館の設立趣意・利用案内・グッズ・定款
- 2ー 記念館概要（展示資料から／記念館の歩み／宮入慶之助記念館だより／出版物）
- 3ー 宮入慶之助とは（略歴／業績／九州大学と宮入慶之助／小惑星と宮入慶之助）
- 4ー ミヤイリガイとは（日本住血吸虫とミヤイリガイ／生態／発見の意義）
- 5ー 日本住血吸虫の制圧（筑後川流域とミヤイリガイ／広島県片山地方とミヤイリガイ／甲府盆地とミヤイリガイ／住血吸虫の現状）
- 6ー 寄生虫・感染症事情（マダニとライム病／寄生虫体験記／寄生虫と環境／農村医学と回虫）
- 7ー 展示アーカイブス（日本住血吸虫中間宿主発見100周年記念展）



▲ ホームページのトップ画面

記念館の団体見学から



▲ 10月14日西寺尾地区地域巡り 20人来館



▲ 11月29日篠ノ井歴史の会 23人来館

資料整理から ～収蔵資料唯一の肉筆原稿～

慶之助は昭和9年3月から12月まで日本伝染病学会雑誌8(6-12)・9(1-3)に「フリードリッヒ・リョフレル先生」と題して、ドイツ留学時の恩師などについて記しています。この資料の記念館への受入れの経緯やドイツ留学の事などについては、「記念館だより第21号」に宮入建三氏が記していますので、ご参照ください(記念館ホームページ「記念館だより」バックナンバー掲載)。

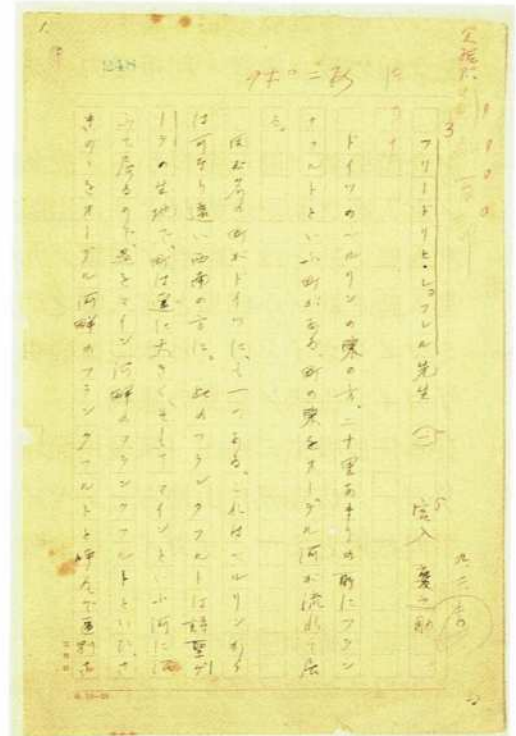
この肉筆原稿は三越製のB5判縦書き原稿用紙(25字×10行)に濃い目の紺色インクで万年筆によって書かれています。連載(一)の原稿用紙の右下には、「九. 二. 二〇」とあり、昭和9年2月20日の日付が見て取れます。上には「9ポイント」と印刷文字(9ポイント)と段組みについて本文とは異なるインクの色と細字の万年筆で指定しています。また右上に赤字万年筆で「完結後」、鉛筆書きで「別刷百部」とあり、連載完結後に別刷は100部希望する旨を記しています。連載原稿の頭にも同様に別刷のことが記されています。原稿用紙全ての左上には紺色スタンプで「日傳」とあり、「日本伝染病学会雑誌」のことを意味するものと思われる。

左上隅には原稿用紙の通し番号が手書きで記され、その下には青色のゴムスタンプで三桁の数字が押されています。この三桁の数字は、日本伝染病学会雑誌の当該各号誌ごとに掲載された原稿の通し番号ではないかと思えます。手書きの通し番号は1から299まであり、299枚の原稿用紙を確認することができます。10回にわたり連載された原稿は、各回ごとに右上を紐綴じされています。2回目の原稿の欄外に、「この原稿ハ村山校校正済ノ節ハオ届ケ下サイ」とあることから、連載終了の

昭和10年ごろに村山達三氏宅(東京市立駒込病院長・慶之助長女加久嫁ぎ先)に届けられて保存され、2014年3月に当館に寄贈されることとなります。

原稿は漢字と平仮名で書かれています。赤鉛筆で「片カナ」と指示があり、印刷では指示通りに漢字と片仮名混じり文となっています。明治期以降の日本語表記では、「漢字片仮名交じり文」が論説文や公文書で使用されており、慶之助も学問的な文章ということで片カナを指示したのではないかと推考するところです。この肉筆原稿を通して、印刷成稿では分り得ない慶之助の原稿執筆に対する姿勢や考え方が伺われます。

慶之助は多くの論文や単行書を出していますが、この資料は収蔵資料の中で唯一の肉筆原稿であり、慶之助69歳時の息吹を伝える貴重なものですが、ドイツ留学は明治35年から37年であり、それから30年後にこの原稿を作成して発表した意味は現時点ではわからない所です。



編集後記

○2月13日が宮入源太郎前館長が逝去されて1周忌ですが、改めて記念館に注がれた熱い思いを感じています。

○地元の長野で宮入慶之助の存在を少しでも知っていただく施策を考える上で、子どもたちへの読み聞かせは有効な方法だと思います。

○今号は6ページで編集発行となりました。

宮入慶之助記念館だより 第27号

発行者 特定非営利活動法人宮入慶之助記念館

編集者 山口 明

〒388-8018 長野市篠ノ井西寺尾 2322

Tel&Fax 026 (293) 4028

メールアドレス miyairikinenkan1999@gmail.com

発行日 2019年(平成31年)3月6日